

## 「ゴー、ウエスト！ ヨーロッパ激烈2週間」の巻

### 其の弐

長旅の後、ついに念願のボローニャ空港に降り立ち、荷物を受け取って表示に従って出口に進む。と、そこはもう既に空港の外。「あれ？」「・・・？？」何か忘れてるような気がしてならない。そう、イミグレーションだ。いわゆるパスポートコントロールというヤツである。

今まで私の知る限り、空港では入国の際に厳しい取締りがあった。なのに、ノーチェック。「あれえ・・・？」程なくて思った。「あ、そうか。田舎の空港だからうるさくないのかも。さすがEU諸国、進んでるなあ！」と勝手に解釈していた。いや、いくらEU内での出入りが自由になったとはいえ、そんな訳ないのだ。実は、後々知るのだがこういう事だった。

ミラノに降機しトランジットしてゲートを移動する際、航空券とパスポートを提示しなければならなかった。しかし、その際職員からは何の質問も無く、それどころか普段見慣れた日本人とは違う私の風貌に興味を示した係員が「ナカターっ！！」とか言ってふざける始末。

この時、余りにもおちゃらけた雰囲気だったので、まさかそれがイミグレーションとは思いつかなかったのである。

しかし、それにしても・・・。これでいいのか？ おそろべイタリア。ちなみに、一度チェックが終われば目的地ではノーチェックというのはパリでも同じだった。

只唯一、イギリスでは現在でも入国も出国も厳しい審査が待っているのは変わらないようである。

さて、無事にレンタカーの手配も終わり、ようやくイタリアでのパートナーをゲットできた。ルノーのクリオというクルマで、イタリアらしくフィアット500でも来るか？ と期待していただけにちょっとがっかり。



シートに座り、操作系統を確認する。「なんだ、AXと変わんないじゃん」とたかをくくって出発したのが大きな間違いであった。というのも、空港を出てからしばらく走ると全くの暗闇に突入し出した。

「やばいなあ・・・。」予感敵中、街中からどんどん離れていく道らしい。空港周辺なら開けてるから地図なしでも何とかなるさ、と勝手な思いこみで見きり発車したのがいけなかった。結局「これはヤバイ！」と着た道に戻ることにしたのだが、スイッチターンしようとして左車線に頭を入れる。

この時事件は起こってしまった。本来なら、そこでバックギヤに入れて何の問題も無く方向転換である。

しかし、何度バックギヤに入れようとしても1速に入ってしまう。クラッチをつなぐ度にクルマはどんどん前へにじり出るし、もう既に車線一杯、これ以上行くと畑に突進、イタリア初走行たった2~3キロでいきなりロードサービスの手を借りねばならない。

頭の中は既に真っ白でパニック。何度もノブを見て、「もしかしてノブが逆向いてんのかな？」と5速の辺も探すものの、Rギヤは決して見つからない。

そこでふと思いついた。「そう言えば、NASCARのミッションはノブを押さえてRに入れてたぞ」そう思うや否や、おもむろにシフトノブをグイグイ押してみる。でも何の反応も無い。もはや半泣きである。対向車や後続車が無いのが唯一の救いではあったが、しかしこのままでは夜が明けるまで、この間抜けな姿のまま助けを待たなくてはならない。夜もとくに10時をまわっている

さっき空港についたばかりで、長旅で疲れてるし、早くホテルを探してシャワーでも浴びて即刻ベットにもぐりたいのに、何たる醜態。しかし、神様はいるものだ。ウンウン唸っている所に丁度、後続車がやって来た。

ハザードランプをつけて車線を完全に塞いでいる、迷惑かつ変な東洋人のクルマを見つけ、「すわ、何事？」といった形相で止まる。青年に事情を話すと、「何だよ、そんな事か」という感じで「クラッチを切れ」と言う。

私は訳も分らず言われるままにし、青年がノブをクイクイといじると、何とRギヤに入ったではないか！！「え？ 何で??？」

そして青年はそのまま「じゃあな」と言い残して去っていかうとする。しかし、何故ギヤが入ったのかは依然謎のままだ。「ちょ、ちょっと待って！ どうやったの??」青年はメンドクサそうに「いいかい、バックしたい時は、このスイッチをこうして・・・」

おお！ なるほど。どうやらシフトノブの首元にプルスイッチが付いていて、それを引いたまま左前に持って行くとRギヤに入るという仕組みらしい。「グラッチェ、シニョール！！」

かくして、無事スイッチターンも決まり、ボローニャ市街地へたどり着く事が出来た。もともと、それからホテルをカンで探し出さなければならないという大仕事もあった物の、そこは動物的カンを信じて事無きを得る。

翌日。旅の疲れもあって昨日はドタバタが続いたが、一眠りして完全回復。しかも、ホテルの朝食にあったチーズと、ハムの美味しいことったら。周囲の目を気にせずムサボリ食ってしまった。

今日は今回の旅の目的地、パルマまで移動、宿を探してしかも、この近郊にあるであろう「ダッラーラ」社を見つけなければならない。何せ、情報は住所のみ。地図も無けりゃアポも取ってない。その上英語圏外の初めての国、とあっては結構難題なのである。

イタリアでは珍しく平坦な土地(まさに約束の地!)を貫くアウトストラダ、A1号線。ボローニャからパルマまで100キロちょいの道程だが、初めての道にも関わらず、信じられないほど順調にクルマは走る。1.2リッターのルノー・クリオ君は、アクセルベタ踏みでも時速170キロ程度が限界である。明らかに200キロ以上で走る車も多いが、それでも追い越し車線がキチンと機能しているので、後続車の様子さえ把握していれば全く減速することなく前車をパス出来る。

これは感動ものだ。日本ならいつまでもチンタラ追い越し車線をキープしたり、ある特定の車種(ベ〇つとか、または〇ンツとか)は大衆車には道を譲らない場合がありがちだが、ことイタリアではそんな輩は見当たらない。もしコレをしようものなら、この国ではパッシングの嵐で、しかも抜かれ様に顔を真っ赤にして、中指立てながら激しく抗議されかねない。「速いやつが抜く、遅いやつが譲る」これが徹底されているのだ。こんなところからも「嗚呼、これこそが真の自動車文化だよなあ」と思うのであった。

ともかく、気持ちよく無事パルマ到着。ホテルも決めた。問題はやはり「ダッラーラ」だ。ホテルのフロントにいる女の子、リアナに場所を聞く。

「この住所に行きたいんだけど・・・」「え、これパルマじゃないわよ」とさりと言ったのけるリアナ。ちょ、

ちょっと待て、確かに住所には「パルマ」って書いてあるぞ！ どういうこった。折角ここまで着たのに、と一気に脱力。しかし、一呼吸置いて彼女の一言。

「でもね、街には無いけど」と言って周辺地図を引っ張り出してきた。おいおい、ビビらせるなよベイベ。俺だって、はなから街ん中に工場があるとは思ってないよ。だから車借りたんだから。まあいい、彼女の話によれば、どうやら一時間も走ればたどり着けそうだ。「GRAZIE！」の一言を残しホテルを後に再びアウトストラダにのる。

かくして、憧れの「ダッラーラ」社はとてもレースという時間に追われる世界とは無縁な、人里離れた美しい山々に囲まれて存在していた。こんなにも美しい所で、カーボンの粉塵やアルミの切子を巻き上げているのか……。と一瞬たじろぐほど美しい土地である。



「こ、こんちはー」と正面から入るが誰もいない。しばし壁にかけられた往年のダッラーラ製マシンの写真を観賞していると一人のおじさんが入ってきた。ん？この顔、どっかで……。はて？？

おお！ そうだ。この顔は間違い無い、誰有ろうダッラーラの社長さんではないか。

「あ、あのう、工場見学したいんすケド……」謎の東洋人をいぶかしげに観察しながら、「じゃ、コッチおいで」とゲストルームに通された。しばらくして若いエンジニアが「あんまり時間無いけど」と言いつつ中を案内してくれることになった。「ラッ、ラッキー！」心底そう思った。だって、ホントは門前払い覚悟だったのよ。アポ無しだし。

何と、イタリア到着翌日には今回の旅の目的が達成されたことになる。うーん、ツイてる時というのは万事上手くいくものだ。

ダッラーラの工場内はあれだけの量産してるイメージの割にはこじんまりしていて、特にファブとマシンセクションはとても充実している。これらが敷地の大半を占めているのに対し、コンポジットセクションが隅で、

しかも6畳ほどの部屋である事に多少困惑した。どうやら、小物はダララで作り、モノコック等の大物は外注に頼っているという事だった。

そうだったのか。うーん、これではCFRPを除けば、仕事の仕方はウエストと殆ど変わらんなあ……。ってのが率直な感想。

そう言えば「MCは俺はマザックが良いと思うんだけど、一台も無いね」という質問に、ちょっと困った顔をしながら「いや、確かにアレは良いんだけど高いだろう？ウチはそこそこのでいいから、とにかくモノを一杯、そして安く作って客にさばかなきゃならないんだ」と大真面目に言ってのける様が面白かった。確かにその通りかも知れない。

残念ながら、新しいプロジェクトが進行中で、風洞などが納まる別館は見せてもらえなかったがそれにしても、よくもまあ色んなトコを見せてくれた。

礼を言い工場を去る。今度はちゃんとアポを取って、風洞とか見せて貰おう！と、美しい山間を走りながらの帰路、決意を固くするのであった。

「もう一ぺん来よ！」

ところで、目的達成につき、予備日としてキープしてあった翌日は全くのフリーとなり、パルマの街を散策するには丁度良い日となった。

ショッピングモールや商店を覗いて回り、あちこち出歩く。なかでも、ホームセンターでBetaの工具が平然と販売されていて(しかも安い！)なかなかマニアックな様相であった。さすがはイタリア！！「うそお！きゃい〜ん」連発で、Snap-onに並んでBeta大好き人間の私としては、以前から狙っていたものの、高価で手が出なかったコンビスパナをアリタケ買い込んでしまった。

陳列された商品を前に必死に電卓でレートを換算し、落っこしそうになりながら工具を抱えるこの怪しい東洋人を、きっと周囲の客たちは冷ややかな目で見ていたに違いない。

だって、しょうがないじゃん。欲しかったんだからさ。もしかすると、外国でプラダだ、グッチだとショッピングに奔走する日本人はこんなモンなのかも知れないな、と妙に納得する次第である。



パルマの夕焼け。こんなちょっとしたことがとても美しく感じられるのだ。